

都立高入試 話せる改革

「評価難しい」「課題多く」

スピーキングテストでは、受験者が話す微妙な英語のイントネーションを聞いて採点する。週に一回以上、A1+（外国語に一回以上はスピーキングテストがある。入試への導入も不慮ではない」と受け止め

都立高入試でのスピーキングテストのイメージ

I am looking forward to the Tokyo Olympics!

(私は東京五輪を楽しみにしている)

タブレットで拾った言葉をタブレット端末に録音する方法などを検討

ヘッドホン

タブレット

東京都教育委員会は14日、都立高入試の英語科目に、話せる力を知る独自の「スピーキングテスト」を導入する方針を明らかにした。早ければ、現在の小学六年生が受験する2020年度入試から導入する。文部科学省によると、高校入試で英語で話す力を評価するのは、都道府県教委が独自に行うケースとしては初とみられる。

「楽しんで置き去り」

ただ、都教委が今夏に実施したスピーキング評価方法の研究に参加したところ、教諭によって評価が違ってしまう結果になったという。「客観的な評価はやはり難しい」とし、「入試となれば、どこで採点するかは、協会（東京都）の担当者も「公平に評価されるよう採点者の意識が向きがち。英語で思いを伝える楽しさなどが置き去りにされたいようにしたい」と語る。一六三年からスピーキングテストを行う日本英語検定協会

スピーキング20年度にも導入

都教委によると、約五万人の受験が見込まれる。入試の点数など民間機関と協力して実施。採点に時間がかかるため、二月下旬の通常の入試時期よりも前に行う。

都教委は一八年度から難関の英語を話す力を測る試みとして、大阪府の公立高入試で英検などの成績を点数に換算し、入試の点数と比較した上で高い方を選んでいる。また福井県では現在の中学三年生から入試で英検の成績を点数に加算する。

一方、大学入試では二〇年度から大学入学共通テスト学習指導要領では、英語の「読む・書く・聞く・話す」の四技能を総合的に養うことになっている。ただ現行の

「得意でないから」児童賛否

受験の当事者となる小学二年生は、英語を話す経験はないが、「英語を話さなければならない」と即答。海外への渡航経験はないが、「英語を話すのは得意。都が検討するタブレット端末を使う」

「東京オリンピックがある」として、外国人も来る。英語を話すようになるのはいいと思う。この前向きに話した小学六年の男児（二）は、「おんまりの夢はプロ選手。海外のクラブチームに入る夢を抱き、「外国選手と話をしたい」と目を輝かせた。学習塾から帰宅途中の小学六年の男児（二）は自信た

藤川大樹